

# 大正期の「霊術家」と「奥義」

スピリチュアル・テクノロジーリスト

文 秋山真人

Text by Makoto Akiyama

## スーパーパーソナル 超自分能力開発の近代史

**暫** くぶりの連載開始で、私の心は、少々、燥せじいでいるかも知れない。

この数年、実は、大正大学の大学院に社会人入学をさせていただき、宗教学の分野で、修士論文を書かせていただいた。

宗教学は、一般には判りにくい学問かも知れないが、その現場では、感情的なメタファーメタファーで説明が進む事の多い信念、信仰の世界を、「学」アカデミクスである以上、つとめて客観的、実証的にとらえ直すことが進められていて、社会学、心理学など学問の垣根を越えた研究がはじめられている。

そこでは、20代を中心とした若人が、言葉の正しさ、深さを求めて、議論のぶつかり合いをし、いわば修験的学問

会背景とは何だったのか。

日本というタイムカプセルのような島に蘭学が輸入されたのをきっかけとして、幕末から明治にかけて、大量の西洋情報が流れこんだのは、よく知られた事実である。

道がくりひろげられていたのである。

ヒトが何を信じてきたのか、これから、何を信じるようになるのか、この重大な問題提起を、私たちは、ずいぶん永い間、さけて来たように思った。若き先輩達と先生方の導きには、脳と心に、強烈な情熱というパンチをくらった思いであった。シンドサとハジも含め、とても刺激的な〈再青春体験〉で、在野で、スピリチュアルの実践者として、四十余年。師もなく弟子もとらず歩いてきた私には、とても新鮮な時間でもあった。お世話になった先生、先輩方に、この誌面をかりて、あらためて感謝申し上げる所存である。

ところで、ここからが本題なのだが、私が、修士論文の中で触れたテーマは、  
 代を歌うことは、よくもめたりもするが、セーラー服も、学生服も、気がつくくと西洋発の軍服なのである。これは明治政府の日本文化コーディネートの一環であるが、当時、西洋化の中で、大きく変化したものがあつた。その代表が医学なのだ。



おかげで、日本の学校教育は、未だに、西洋の軍服を着せて子供達を学ばせることが当り前になっていて、だれも「おかしい」と言い出さない。君

明治期においても、ヒトの病気の因としてウイルスや、食物などのほかに、「気」や「霊」などの見えない要素を受け入れる考えは根強くあつた。この言葉があやしいと言うならば、単に心の力と呼んでもかまわない。むしろ、精神論のみで、すべてがよくなるなどと言う気はないが、医療と薬にプラスαとして、自分の心を加えてみることで、強さを、霊術の歴史を見ることによって、少しでも掘り下げる試みは、我々や現代社会においても、けっしてムダではないと確信している。

### 秋山 真人 プロフィール

大正大学大学院卒。十代の頃、スプーン曲げ少年として取り上げられ、警察、郵政、雑誌編集長など様々な職をへて、現在は、モバイル企業の大手顧問、コンサルタント、さらに画家としても活動している。イマジニア株式会社にて立ち上げたモバイルコンテンツ、「開運夢診断」は、二億アクセスを超えるメガヒットとなった。国際気能法研究所所長。マインド・アンティーク博物館館長。宗教・スピリチュアル、精神世界のアドバイザーとして長老的存在。一九六〇年生まれ。分野の垣根を越えた広い人脈と交流。

